

# 國府さんとのクルマ談義

深萱 真穂(フリーライター)

2010年5月20日午後、僕は京都市立芸大近くの喫茶店「らくがき」で國府理さんを待っていた。24年間務めた新聞社を3月末に辞め、フリーの物書きとして再出発したばかりだった。旧知の自動車雑誌の編集長に相談して福井県立美術館の「疾走する日本車」展の記事を載せてもらえたので、次は現代美術と自動車の関係をシリーズで書けないかな、と目論んでいた。「雨林車」や「虹の高地」で強く印象に残る國府さんに取材を申し込み、その店で会うことになった。

30分遅れて國府さんは現れた。騒々しい店のテーブルで3時間あまり話を聞いた。まとめた原稿は紆余曲折を経て、他の3人と1ユニットの美術家の記事とともに、ニッシャ印刷文化振興財団が運営するサイト「AMeeT」に「アートの中のクルマたち」として掲載された([http://www.ameet.jp/digital-imaging/index\\_4.html](http://www.ameet.jp/digital-imaging/index_4.html))。記事では主に作品を紹介したから、ここではそのときの國府さんとのクルマ談義について書こうとおもう。

## セリカ ST とカウンタック

國府さんのクルマ好きは、まず家庭環境に起因するらしい。物心ついたときに家にあったのは「セリカ ST、いわゆるダルマセリカでした」。1970年にトヨタが発売した国産初のスペシャルティ・カーだ。「音がけっこう勇ましくて、駐車場から聞こえてきたのが記憶にある」。3歳ごろのことという。その後、実家のクルマはジープ、クラウン、レオーネ、セリカ GT-Fourなどに変ったが「親父はこだわりをもって乗っている感じだった」。

國府さんは70年生まれで、少年時代は世間もスーパーカー・ブームの真っただ中だった。「カッコいいものといえばクルマ、というイメージの中で育った」。小学生のときはクルマの絵ばかり描いていた。「ランボルギーニ・カウンタックをちゃんと描けるのが自慢でしたね。複雑な曲面を立体的に、彫刻的に表現できるのはクラスで1人だった」。ランチア・ストラトスも好きだったそうだから、マルチェロ・ガンディーニのデザインにヤラれた口かもしれない。

## 不朽のシティ、不憫なライフ

初めてクルマを作品に使ったのは20歳ごろ、同級生4人で友人の初代ホンダ・シティを素材にした。クルマが発生する電気ノイズや排気音をマイクなどで拾い、鑑賞者に聞かせたという。のちに解体してボディを屑鉄業者に渡し、エンジンは「処分に困って」地中に埋めた。14年後に掘り出したのが別の作品《地中時間》だ。「でも、あのシティのエンジンはオールアルミで、思ったより腐食してなかった。意外とすべてのパーツはほとんどきれいな状態だった。地上でいろんなことがあっても、よっぽど地中のほうが安定してる。時間の流れ方が違う」

《自動車冷蔵庫》と《Natural Powered Vehicle》には別個体だがともにホンダのライフを使った。71年発売の軽乗用車でよく売れた。「乗るまでは憧れていたんです。ちっちゃいのにドアが4枚あって。大人4人が降りてきたらカッコいいな、とか。でも乗ったら不憫なクルマというか...。(ホンダの)N360はメカっぽくて造形的にもカタマリ感があるけど、ライフはドアのヒンジとか至るところが貧相で。N360みたいに大事にされない」。不憫、という形容詞に愛がにじむ。

## 愛車歴とサンバーLOVE

最初の愛車は軽トラックのスズキ・キャリィ。学生時代だ。続いて「キャリィのバン、エブリィになるのかな。ワンボックスのです」。キャリィはのちにも「ハイルーフとかいろいろ」乗った。次が作品「自動車水槽」になったスズキ・アルト。フォルクスワーゲン・ビートルは「一瞬でした」。マツダのアスティナ、これも「一瞬」の日産パオを経て、スバルの軽トラック、サンバーに行き着いた。以下、サンバーへの熱い想いを滔々と。

「今はサンバー以外、乗る気がしません。ただし前後トレーリングアーム式サスペンションの、20年ぐらい前までのです。新しいのは前がストラット式ですが、トレーリング式のほうが理にかなってるし、動きが好き。エンジンは2気筒でメチャクチャいいものではないですが、リアエンジンで、ハンドルの軽さと後輪の接地性は他の軽トラと全然ちがいます。82年式のエンジンが壊れ、車検切れの89年式をエンジン載せ替え用に買いましたが、状態が良かったので車検を取って乗ってます。古いのはチョークが手動、ブレーキの倍力装置もなくて、バイクみたいなダイレクト感がすごく好きです」

## クルマは言語

國府さんの作品に登場するクルマを、僕は文明社会の象徴のように見ていた。でも、もっと本質に根差しているようだ。「僕にとってのクルマというのは、言葉のひとつというか、僕が使用してる言語のボキャブラリーというか。普通の人が日本語を話してるように、僕が僕の考えてることを乗せる言葉がクルマなんですよ。クルマが自己表現の手段というか」。そう言うと暴走族みたいですけど、と笑った。だからこそあの作品群なんだ、と僕は深く納得した。

話は尽きなかったが國府さんには次の予定があった。店の駐車場で「またクルマの話でも」と言い交して別れた。その後、神戸のローズガーデンで、大阪のアートコートギャラリーで、京都のアートスペース虹や芸術センターで、西宮の大谷記念美術館で出会ったけれど、展示会場で話すのはもっぱら作品のことだった。2013年のあいちトリエンナーレでも、暗い展示室で不穏な蒸気上げる作品について話した。それが彼との最後だなんて、そのとき僕には想像できなかった。